



旭川文学資料友の会
友の会通信
 第22号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
 〒070-0004
 旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
 電話 0166-22-3334
 印刷・株式会社あいわプリント

詩画展について

森 夏生

十月二日から十一月二十二日まで第三十二回旭川詩人クラブ「詩画展」が開催されました。会場の旭川文学資料館第二展示室前の廊下には、テーマ「空」の会員による詩が展示され、会場の中には一人ひとり割り当てられたスペースに一年間の労作が掲げられました。今年は久しぶりに四人の新入会員が増えましたが退会者も居て、出入りの多い年でした。しかし、新会員の詩を目にする事ができる新鮮な喜びは又格別でした。

詩画展が始まって何日かたったある日、知人から電話がありました。会員の中に知り合いがいて、詩画展の案内が来たので会場へ行ってきたとのこと。一人ずつ観ていくと、森夏生の所に私の写真があり、驚いて係の方に聞くとペンネームで書いていることを知ったとのことでした。絵の描けない私は、趣味の写真を使って詩と共に展示しているのです。今年の私の展示のテーマとして「いのち」を

掲げていて（これは個人的なテーマ）その中に私の七十六歳のバースデーに愛猫ララと一緒に写したものを飾っていたのだのでした。控え目に小さい写真にしたのですが見つけてくださったのですね。

またもう一人の友人からの電話は、展示者の新人の中に良く知った人が居て驚いたとのことでした。これらの方々の思いの中には、「詩」を書いていることを知らなかった、そんな難しいものを…ということがあっても知れません。でも会場へ足を運んでいただければ、ああ、こんな詩もあるの、これでも詩なのか…、私にも書けそう…、と想っていただけではないでしょうか。そうです。私にも難しい事は判らないのですが、人間には何かの時に溢れ出てくる想いを表現したい心があるのではないのでしょうか。私はそんな時を書き留める手帳がその辺中に置いてあります。ですから私の詩は全く子供の言葉の様です。詩が判らない、難しいと思われたい、生命の中から湧き出てくる「ことば」なのだと思つて頂くために、工夫して会員一人ひとり心を込めて展示している「詩画展」なのです。

謹 悼

旭川文学資料友の会 菅野 浩 会長が、平成三十年十二月十六日逝去されました。茲に謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

旭川文学資料友の会

「友の会通信」に寄せて

舟橋正弘

旭川文学資料館は、今日も常磐公園の一角に静かに立っています。

旭川文学資料館は、平成二十一年五月に開館、旭川市が管理し、旭川文学資料友の会によって運営されています。

文学資料館は、旭川と近隣の「文学の軌跡を記憶し、継承、発信」しています。

この文学資料館では、企画の一環として、多年にわたり旭川詩人クラブの詩画展が開催されています。

私は、クラブの一年生です。振り返ってみると、小・中学校時代は、国語は好きな教科の一つでした。成人になってからは、詩を読むことは好きでしたが、詩作は無力の私でした。それが、詩人クラブの「詩と遊ぼう」のキャッチフレーズに誘われ、クラブに入会することになってしまいました。

今回の詩画展には、勧められるままに拙い詩を展示しました。少し恥ずかしい気持ちになつていますが、会員の皆さんの詩画は、どの作品も力作ばかりです。詩画を愛する市民の皆さんの来場を期待しています。

旭川文学資料館は、その他にもいろいろな企画展を実施されていて、市民の文学の教養

を高める活動をされていることに敬意を表します。

終わりに、旭川文学資料友の会が、「友の会通信 第二十二号」を発行されることに当たり、私の拙文を載せていただくことに深く感謝し、文学資料友の会の益々のご発展を心から祈念しています。

詩画展に参加して

荻野久子

「旭川詩人クラブ」が誕生したのは、昭和五十二年九月、とメモがあります。「詩画展」については定かではありませんが、詩について書き始めたばかりの頃でした。

思い起こしてみれば、旭川文化会館での展示、そのあと、西武デパートのA館、B館をつなぐ廊下の両側の壁に展示されたこともありました。その後、NHK旭川放送局のギャラリーでの展示、喫茶店「千絵莉」店内の壁に展示された事も数年間ありました。その頃は一人につき一点の作品だったと思います。

その後、現在の旭川文学資料館の展示会場に移り、展示面積も広くなり、一人につき一点では物足りなくなり、

企画そのものも検討されるようになりました。期間中に、来賓の講師もお招きして講話をいただいたり、音楽を交えた催しもありました。

詩画展という行事に参加させて頂く事により、その年ごとに、詩画についてのアイディアを掘り起こす作業も、頭脳の体操になつていると思います。

「旭川詩人クラブ」の内外からの皆様のご意見も頂きながら、今後も継続できる事を希望しております。新鮮な息吹を支えるために意見を求め合い、考え方をまとめながら進行してゆきたいものと願っております。



常磐公園文学碑めぐり

東 延 江

幼なじみの俳人 前田弘さんが発行人の俳誌「歯車」に、「北海道の句碑探訪」を連載し始めたのが二〇一一年十一月号からで、この十一月で満七年、合計一四基を紹介し、来年以後二〇二〇年十一月号まで計七十八回で、残り十二回十六基を紹介することになり、原稿はすでに最終まで渡してあるので、終わる前に私があちらの国に行ったら遺稿となる原稿が「歯車」にあるということになる。前置きが長くなつたが、さて旭川には何基の碑がどこにあるのか。

まずこの旭川文学資料館から出発してみた。

資料館を常磐公園に向かって出るとすぐ、左手に「今野大力詩碑」、右手に「小熊秀雄詩碑」がある。

右回りに歩いてゆくと、ボート乗り場を越え、少しゆくと「風雪の群像」の像が見える。その群像の裏面に更科源蔵の詩「風雪百年」が刻まれている。

群像を眺め、目を転じれば、丸みを帯びた「大塚千々二句碑」が飛び込んでくる。

更に歩いてゆくと右手に道立旭川美術館が見え、美術館を横目に公園の中の遊歩道を進

むと、これまたかわいい碑が右手に見えてくる。「西本一都句碑」でこの碑の

ななかまど十三葉の露涼し

の句に、ななかまどの葉を数えてみたのは私ばかりではあるまい。

一都句碑にさようならをして池の縁にあるのが「岩村通俊歌碑」で、常磐公園の文学碑は終わりとなる。

公園の中に更科源蔵の裏面詩を含むと六基の詩碑・歌碑・句碑を見ることが出来る。公園の四季を楽しみつつ、文学にもほんの心を止めてもらえたら、とひそかに願っている。

かつて公園の中の売店「みづわ荘」に俳人高橋貞俊・木村照子さんがいた時代、今はなつかしさにかわってしまった。

売店はなくなり、貞俊さんは逝き、木村照子さんも引越してしまわれた。



世の中に涼しきものは上川の
雪の上に照る夏の夜の月
岩村通俊歌碑 (1938.11.12)
常磐公園内



ななかまど十三葉の露涼し
西本一都句碑 (1970. 6. 14)
常磐公園内



太陽も宇宙の塵か日向ぼこ
大塚千々二句碑 (2003. 8)
常磐公園内

有島武郎と『松むし』

—その一—

片山 礼子

前号に引き続き、有島安子『松むし』についてふれたい。

一、白百合に似たる子なればその胸に露や置くらむ母やみてより

この歌には、安子のわが子を思う心がよく表現されている。そんな安子の心の痛みが伝わる一首である。「白百合」から子どもの清らかさが伝わる一首である。

大正四年二月、この当時、武郎と安子との間には、長男・行光(ゆきみつ)は四歳、次男・敏行(としゆき)は三歳、三男・行三(こうぞう)はわずかに一歳と二か月であった。

二、ほゝゑみと涙の外に言葉なきちさき心の母恋ふるかも

「ほゝゑみ」と「涙」そして「言葉なき」とわが子を心配している安子の気持ちがよく表現されている。幼心に母を慕う思いや切なさが伝わってくる。

三、神かけて子等思はじと病むわれの誓ひし
日より世は變り見ゆ

一と二と同様に子どもを対象としているが、一句目から二句目「神かけて子等思はじ」と安子の強い決心が伝わる一首である。

四、わが子等に似たれどかなし人形のつづらなる眼はまだゝきもせず

安子は病室で子ども達のことを思わなかったことは一日たりともなかったであろう。わが子に似た人形、心が躍ったに違いない。しかし、そうした気持ちもつかの間のこと。哀しいけれども、わが子に似たその人形の可愛らしい眼はまばたきをしない。当たり前のことだと認めているながらも、その現実と向き合っている安子の情緒に触れることができる、他にも、子どもを対象にした歌が詠まれている。

五、わが胸におさなき子等は日毎来てとく癒えませと涙していふ

六、うつらへおぼえる夜の国夢さかひまよひいりつゝおさなごの笑む

七、子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て

八、わつと泣くおさなき声をわが子かと夢よ
りさめてふと見まわしぬ

(番号は引用者)
と、七十一首中、全体の十首以上の短歌が子どものことを詠み上げている。このように、『松むし』に収められた安子の詠んだ短歌からわが子への深い愛情や思いが伝わってくる。



当館所蔵の有島武郎の珍しい著書

旭川文学私稿

岡和田 晃

旭川とは、文学不毛の地である。

文学史の話ではない。それが私の実感だったのだ。転機となったのは、二〇一四年。第四十七回小熊秀雄賞記念フォーラムで、講演『飛ぶ櫓』と『飛ぶくしゃみ』く小熊秀雄と向井豊昭をおこなってからのことである。

背景は、拙著『反ヘイト・反新自由主義の批評精神』へ収めたエッセイに書いたが、手弁当で「文学」を盛り上げようとする熱意に感銘を受け、視座が抜本的に更新された。

一九八一年に生まれ、上富良野町で育った私は、国道二三七号線やJR富良野線の圏内を、さながら庭のごとく感じてきた。大学に入るため上京し……その後に関東で過ごした歳月は、故郷で暮らした時間を、すでに上回ってしまっている。けれども、北海道という土地、さらには北方の精神像に、後ろ髪を引かれながら過ごしてきたのは確かだ。だからこそ、「北海道文学」に関する仕事は、私にとって一つの核としてあり続けている。

小学校のときから、物書きになりたかった。自分という存在の一回性を確かめたかったからだ。中学に入り、それはRPGを作る

人への憧れに変わった。表現する世界像が進展したのである。『トンネルズ&トロールズ』等の英語圏のRPG作品は、ツールキンやダンセイニといった幻想文学に、一つのルーツを持っており、実のところそれは、美瑛や富良野といった風土のイメージと重なり合う部分が少なくない。その正体を探る営みが、批評的思考との出逢いであった。

高校では世界文学を耽読し、古本の探索に没頭した。セルバンテスを読み、ショートショートを書いて商業文芸誌の賞を受けた。けれども、同級生に私が思う「文学」へ関心を持つものは一人としていなかった。賞をとった作品は、高文連で「文学ではない」と否定された。武道に抛り所を求め、少林寺拳法同好会を創設、後に部へ昇格させることができた。身体性を再確認できたものの、誰とも文学の話ができなかったのは苦しかった。

唯一、話が合ったのは、旭川北高で国語を教えてくれた大原克之先生である。無類の読書家で、戯曲「綱を引く」は、商業出版されたアンソロジーにも入っている。つまり私にとって、初めて出逢った「プロの作家」だったのだ。防衛大学校へ受かったのに、物書きになる夢が諦めきれず、早大文学部へ進んだのは、大原先生の影響である。その後、あれこれ紆余曲折はあったが、文芸評論やRPG創作・翻訳の仕事に就くことができていた。

近年、「北海道文学」関連の調査で旭川文学資料館へお邪魔するようになったが、学芸員

の杳澤章俊さんは、実は大原先生に教わったという縁があった。資料館のアーカイブが優れているのは、自分は一人でないと感じてくれる点にこそある。実際、高野斗志美、塔崎健二、佐藤喜一などの批評は、現在の閉鎖的な文学状況に風穴を開けるように読み替えていくことも、十分に可能だと確信する。



おかわだ あきひろ
岡和田 晃 プロフィール

昭和56年(1981)上富良野町生。旭川北高校英語科、早稲田大学第一文学部文芸専修卒業、筑波大学大学院人文社会科学部研究科一貫制博士課程文芸・言語専攻修士取得退学。

高校時代に第2期「T-L-L」(新風舎)のショートショート・コンテストに入選。

第50回北海道新聞文学賞創作・評論部門佳作(評論として二十二年ぶりの入賞)。

〈北海道新聞〉では「現代北海道文学論『北の想像力』の可能性」のリレー連載を企画・監修している。



「教科書の中の 文学者たち」を 鑑賞して

佐藤 博 己

本年六月十二日から九月一日まで開催された、第二十一回旭川文学資料展「教科書の中の文学者たち 国語教科書を中心に」の感想を述べる。

まず、明治三十六年の小中学校令の改正により、尋常小学読本からスタートした国定教科書の変遷がわかりやすく展示されていたと思う。特に、最初の尋常小学読本は、通称「イ・スシ読本」と言われ、「発音ノ教授ヲ出発トシテ」作られている。このことで、明治期の日本は、方言の差異が大きく、標準語の普及が急務であったことが伺われる。

また、旭川に縁のあった文学者についての展示では、宮沢賢治に関するものが印象に残った。

平成十五年八月二日、旭川東高校に宮沢賢治の詩「旭川」の詩碑が建立された。この詩は、賢治が大正十二年の夏、樺太へ向かう旅の途中で旭川に立ち寄った際の印象を書いたものである。

賢治は、早朝の停車場で小さな馬車に乗り、「農事試験場」まで行くよう馭者に言った。

馬車は、旭川駅から北へ、「師団通」と呼ばれていた街道（現在の平和通買物公園）を爽やかな風を受け走ってゆき、途中で騎馬従卒とすれちがうが、その馬は賢治の好きなハックニーであった。

さらに師団通を進み、六条通に至り、賢治は、落葉松やポプラ、柳の街路樹を愛でながら進んでいった。

この詩は、小品であるが、あたかも一つのビデオクリップを見るように、旭川の街での賢治の姿をいきいきと表現している。

また、展示では、賢治は亡くなる直前に父親に対し、法華経を千部印刷して友人・知人に配布するように遺言をしたエピソードが紹介されていた。



所蔵資料 旭川東高校文芸部「炎」
旭川東高校文芸部の機関誌「炎」のバックナンバーを探しています。
お持ちの方ありましたらご連絡ください。



展示室 学校文芸のコーナー
卒業文集などありましたらおゆずりください。



資料室の書庫です。

十二月からの企画展

旭川文学資料館企画展

「旭山動物園の五十年展」

について

(十二月二十四日)

～平成三十一年四月二十七日)

旭川文学資料館では、特に冬期間、文学というジャンルをこえて、より生活に身近な視点から文学者やその作品を紹介する企画展を行ってきました。「旭川冬まつり・冬の風景展」、「子供の遊び展」、「広告ポスターとチラシ展」、「年賀状・ハガキ展」、「旭川駅今昔物語」、「生活資料雑貨展」など。

今回は、五十年余りをむかえた旭山動物園の軌跡を当館なりの視点から振り返ってみていと思っております。

旭山動物園ができた頃は動物園建設ブームで、昭和三十年代には東京の多摩動物園、日立動物園、北海道では昭和三十八年の帯広動物園、四十年代に入ると広島のア佐動物園など大型の動物園が七園もできています。

旭山動物園は、今や全国で知らない人はいないと言っているほど有名な動物園となりましたが、開園にこぎつける前までもいろいろな苦労があったようです。

そして一九六七(昭和四十二年)七月一日、日本最北の動物園として開園しました。開園一ヶ月で当初目標の三倍以上にあたる十五万人以上の来園者があったそうです。

一九八三(昭和五十八)年には北海道内初のジェットコースターを導入。この年の入園者は約六十万人にとどく勢いでした。

しかし、遊具の時代は長く続かず、開園後二十年もすると施設の老朽化も進んできました。それを補修する予算がつくこともなく、動物園はまさに冬の時代をむかえます。

逆境の中で、職員たちは真剣に議論し、理想の動物園について語り合いました。

一九九四(平成六)年、新しい旭川市長が誕生します。市長は園長(当時は小菅正夫園長)を市長室に招き、動物園構想を聞くことになりました。園長は日頃から皆で考え続けていた構想を熱く語り、会談は予定の時間を二時間以上もオーバーしたそうです。その熱意が実り一九九六(平成八)年度予算で新施設「こども牧場」がつくられました。これをきっかけに次々と新しい施設がつけられ、動物園は活気づいてきたのです。

今回は、旭山動物園、旭川市中央図書館各位の御協力を得て、時代順に、写真、ポスター、パンフレット、「モユクカムイ」等を中心に展示してゆく予定です。

また、旭川の短歌グループの方々の動物園にちなんだ短歌作品も展示いたします。それから動物園関係の図書や「動物園と文学作品」

のコーナーも設けます。

動物園の門をくぐるように文学作品の中へ入っていただく機会となれば幸いです。

尚、期間中、関連イベントとして旭山動物園園長の坂東元氏の講演も予定しています。

学芸員 沓澤章俊



作品鈔

川柳

ときわ木川柳会

十一月句会

路地奥に昔の思い置いたまま

石塚えいぐ

真っ白な雲のふとんで寝てみたい

伊藤比呂志

あの雲の隣の星が父と母

後路 和笑

きのご雲平和の誓のしかかる

小笠原つかさ

つい拍手読んで同意の投書欄

岡野 岡優

メーカーもお上に倣いうそを吐く

斎藤 けん

さみしくはないよと笑うちぎれ雲

野村つとむ

早すぎる雲に戸惑うこの体

松倉いづみ

賽銭も電子マネーではいチャリン

三浦 猪口

手を貸すかここは黙視か反抗期

水野 悠遊

変革をさがし沖縄旅をする

宮崎 勲柳

飛んでいけ飛行機雲に載せた愚痴

山中 歩月

詩

今は

出雲 章子

リラ

土橋 和子

求めているものが多すぎて

いつも いつも追いかけている

見るもの 聞くもの

不思議と不安がいつぱい

その先が知りたい

確かめたい

命あるものは無意識に生き

花は種を残すために咲く

川は一滴の滴しずくから生まれ

海に繋がる

山は何から出来ているのか

月も太陽も軌道は計算できるが

なぜそこにあり 輝く

星も瞬き続ける

地球も……

与えられた答えは信じられない

そうして

私はどのように死んでいくのか

「知る人もなき

リラの街リラ白く」と

昔 句を投句したら

主宰はこの句の批評を

リラの枯れゆく時の白さを

句にして良い句と：

白いリラは

御存知なかったのかは

お聞きしなかったが：

その大先生も

天国へ

沢山の句友・師も友人も天国へ

さぞ楽しい日々でしょうか？

笑い声も聞こえるかに

白いリラは淋しい花

「リラ白く

人恋ふており夕かな」と

句にしてみた

俳句

西川良子

耳の日の聴く耳聴かぬ耳同じ
かたつむり生命線をさかのぼる
押入れの隅に美顔器秋立ちぬ
踏めば鳴く雪にときどき泣かさるる
猛吹雪明日が見ゆるまで灯す

河野秀子

木の葉掃く資料館長丸き背
焼きたてのパン買う列や秋深む
昏れなすむ街の晩秋音たてて
故郷はゴッホの色に豊の秋
種蒔くや手に登り来る地の火照り

旭山寸言
「俳海」平成三年七月号
藤田旭山追悼号

短歌

「北方短歌」最終号より
平成十三年三月号

旭川 小林孝虎

冬の夜はなべてかなしき妖精も
かの森ふかく眠りをるべし
アザレヤの花くれなるに咲きしかば
いよいよ近しわが退院は

胸にゐるひとりを永く慕ひゆく
こころ尊き大正を思ふ

意志つよく互みにかばふ心処に
触るればなほも会ひたきばかり

優柔を責めたつるこゑ聴くべしと
孤りの炎あをあをと点す

第三歌集「遍歴」より

岡井隆一

モツアルトの深き悲哀の二短調
四重奏しき佐賀に住みし日
過ぎし日は帰ることなし遠き日に
合奏せし曲をラヂオはきかす

一列に植ゑし水仙一様に
蕾かたむく太陽の方向に

十数年の昔とはなる春光台を
栗鼠撃ちの場と子の告げたるは

暫らくをみつめ合ひるつ丘の樹に
影かくしたる縞栗鼠の眼と

「旭川歌壇」第二十号より

犬飼 蕃

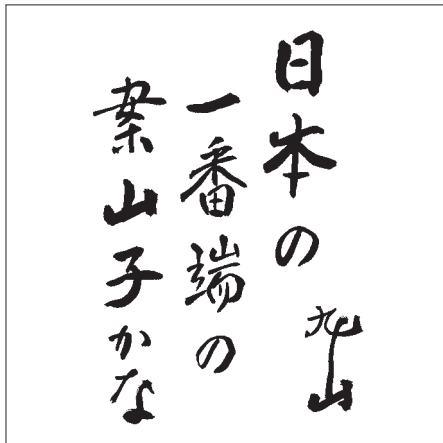
動乱の苦難を生きし亡父母を
偲びつつ弾く昭和の懐メロ

我が身体褒めてやりたし心肺を
病みつつ喜寿の間近に迫れば

冬支度終へて窓辺に微睡めば
晩秋の陽差しの温もりやさし

閉校後幾年ぶりに訪ぬれば
学舎は暑き蝉しぐれ中

久しぶり歌誌『かぎろひ』に
吾が短歌の合評載りしを繰り返して読む



資料館だより

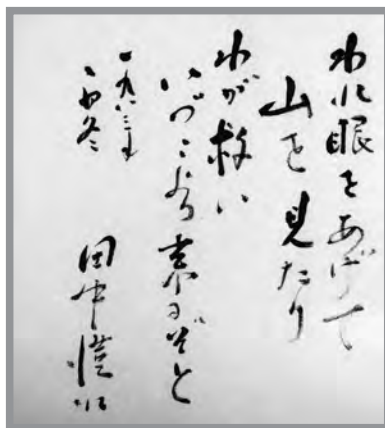
佐藤比左良氏
寄贈

上林 猷史
色紙

田中 澄江
色紙

小原 千代氏
寄贈

小林 孝虎
色紙



受贈資料

(二〇一八・六〜二〇一八・十二)

- ・山本香代子 花輪墨雨関係資料
- ・中家菜津子 『うづく、まる』、中家菜津子詩集『水の器』(装幀力二工・ナハ)他数冊
- ・高階 文男 文芸同人誌「愚神群」2、3、4号他
- ・佐藤比左良 色紙(田辺三重松、上林猷夫、草野心平、一原有徳、田中澄江他)
- ・前田 恵 『たかす開拓物語』
- ・高橋 絹代 詩誌「くれっしえんど」
- ・笠井 嗣夫 『アユラスのいた風景』笠井美希遺稿集一九九六〜二〇〇五
- ・岡和田 晃 『反ヘイト・反新自由主義の批評精神』
- ・平田 理摩 司野道輔関係資料(段ボール箱五箱)
- ・堤 静波 農村用高等小學讀本
- ・甲斐千枝子 宮柵二写真、宮柵二書、宮柵二墨筆集他
- ・中村 洋一 『隨筆北海道』(山下秀之助編)、中谷宇吉郎『樹氷の世界』他
- ・松本 悦子 俳句関係本(段ボール五箱)
- ・小原 千代 小林孝虎色紙二十枚(うち楓久雄画入り三つ)
- ・織田 典子 奥山寿(ひさし)の動画
- ・菅野 浩 毛利恒之『月光の夏』、小池喜孝『鎖塚』他
- ・相川 正浩 旭川関係本三四五冊、道内関係本一五五冊、小熊(賞)関係本三〇冊、啄木関係本十六冊他
- ・松井 晶彦 小熊秀雄「焼かれた魚」台本(韓国語翻訳付き)他

その他、東延江、岡田勝美、雪華俳句会、十河宣洋、柴田望、高澤光雄、各地文学館、記念館報、各地市民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんの方の寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

【新入会員】(平成三十年度) 五名

宮崎広美、斎藤嶺也、宮川佳子、前田寿賀子、松原泰子

【退会者】 六名

【現在会員数】 一七九名

編集後記

毎日沢山の本を見ながら仕事をしていると、どの本にも作者があり、読者があることにふつと気付くことがあり、不思議な気持ちがある。

この沢山の本の一冊一冊がもとの持ち主のかけがえのない一冊だったのでなにかうか。なかには思い出の一冊もあるだろうなどと思つて考え込んでしまう。なかには、何度も手に取つて傷んだものもあり、持ち主の想いが伝わってくるものもある。

それらの本がもう一度、多くの人たちの目に触れる機会を多くしたいと思つています。

お願い

写真等のご寄贈を頂いたときに、一番苦労するのが何時、何処で、何の時、それと写っている人の名前が分らないことです。出来れば、分かる範囲で記録したものを付けて頂けると嬉しいのです。

本や雑誌を捨てる前に一度、文学資料館にご相談下さい。古いものほど貴重なものがありますので。